

ちゃんかわいい」と言う。ゆうちゃんもお兄さんになったようだ。

こうして一〇カ月がたち、ゆうちゃんは人とお話をしたい気持ちが育ち、他の人にもゆうちゃんのこととは理解

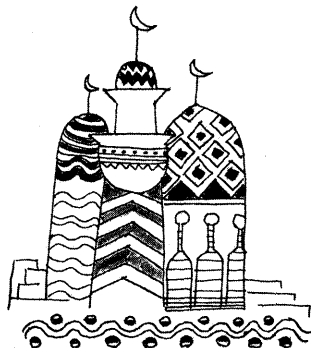
しやすくなった。しかし、同年齢の子どもといっしょに生活するには、自我の力はまだまだ弱く傷つきやすい。情緒障害学級の援助を希望し、普通学級に入学することにした。

(このはな児童学研究所)

「お店やごっこ」実践の史的考察

— 昭和前期の「生活」への着眼による
実践を中心にして —

師岡 章



〔はじめに〕

今日、保育現場の大半でなされている“お店やごっこ”実践は、その捉え方によって様々な扱われ方をされている。

例えば、園児獲得のための目玉保育や早期教育・能力主義などの発想と結びつく中では、親向けの製作展的な見栄え中心の実践が展開されていたり、一方で、保育の中心に子どもをおき、主体的に活動に取り組む実践を展

開していかうとしながらも、保育者主導のやらせ型におちいつる状況がある。

こうした状況は、単に“お店やごっこ”実践のレベルに留まらず、保育全般に通じるものとして、保育現場の共通の混乱を示していると言えよう。その意味で、この“お店やごっこ”実践そのものを見直していく作業は、保育そのものを見直していくものに通じるであろう。

ここでは、そうした視点に立ち、歴史的な歩みを見直していく中で、明日の保育の在り方を問う事にしたい。

(※実践のあらましは四七頁の図表参照)

1 誘導保育案における“お店やごっこ”

昭和9年に刊行された倉橋惣三による『幼稚園保育法真諦』は、彼の考えを現場の教職員(保姆)に向けて組織的体系的に述べたものである。

ここでまず取り上げる「大賣出しあそび」は、その第四編「誘導保育の試み」に掲載され、読者(保姆)に向けて「一定の型と、繰りかへされる手順」のもと「ラク

ラクと保育すること」を否定し、「工夫」または「^①独創」的に実践を展開することを示したものである。

これは、当時「先生の計画どおりに」「小きざみに教育効果をあげ^②」ていく保育項目羅列主義に対して、「子供の興味に即した主題をもって」「生活にまとうりをあたえる^③」誘導保育案による実践を提唱したものである。

つまり、実践的に保育者主導でない子ども主体の生活の充実に着目し、「主題の誘導力によって生活が次々に生み出され^④」る展開を考えたものである。この事は、今日においても重要な意義を持つものであろう。

しかし、具体的な実践を見ると、その展開上いくつかの疑問点が生じる。以下、事例と共に上げてみると

イ、個々の興味や意欲を無視し主題(目的)の自己(集団)課題化なし

(例) やりたい店を子どもがいらないところで決定し、
分担もクジ引きで決めさせる。^⑤

ロ、子どもによる活動(生活)の展開・問題解決なし

(例) 店構えや売り出し方の注意を保姆が取り仕切る^⑥

ハ、表現技法・創造性の欠如

(例) 製作物(商品)の作り方の伝授・保姆のイメージの先行及び押しつけ。⁸⁾等である。

結果、全体としては、倉橋の理論と矛盾する実践という印象を持たざるを得ない。しかし、それはこの実践者(保姆)個人の問題なのであろうか。次の実践を考察しながら、その点を明らかにしてみる。

2 『系統的保育案の実際』における「お店やっこ」

昭和10年に倉橋と東女高師附幼の保姆との共同研究による『系統的保育案の実際』は、倉橋理論の実践的帰結というだけでなく、保育史上初の体系的保育案の登場としてその意義は大きい。

しかし、系統的保育案を「生活」と「設定保育案」という大きく二つに分けた上での内容は、各保育案の独自性や有機的関連性は明らかにされないまま、『幼稚園保育法真諦』で示した自己充実―充実指導―誘導―教導の保育法の4ステップを、園生活全体の中に位置づけたた

けの段階的な保育案であった。こうした点において、この案は、子どもの生活をありのままに受け止めると共に、その関連性を正しく捉え、仕組みを明らかにしようとする保育構造論の先駆的なもの⁹⁾と云う主張もありはするが、宍戸健夫氏も指摘するように「保育方法的立場からの段階的カリキュラム」¹⁰⁾と位置づけるのがより正確な評価であろう。

さて具体的な「おもちゃ屋」の実践であるが「大賣出しあそび」と同じ年少児である。時期的には10週早い10月からの取り組みであり、期間も約5倍となって先の実践者(神原キク)の反省(子どもがだれるから10日×2週間がよい)¹¹⁾とは逆なものとなっている。この事は『系統的保育案の実際』から「期待効果」という欄が設けられたことと関連すると見られる。

つまり、活動そのものから期待されるねらいと「幼稚園令」(大正15年公布)で示された保育項目を意識する余り、それらを誘導保育案を通して「生活の内に総合させ還元」¹²⁾させたため、結果的に誘導保育案そのものを肥

大化させてしまったと言える。

この中で疑問としてあげられる点は1で指摘したものとほぼ同様なものである。確かにその導入については、先の実践よりも工夫がなされ、言葉による意欲の抽出ではなく、場（まず、店がまえを保姆が作っておく⁽¹³⁾）の設定による働きかけがなされている。その意味で、誘導の方法は高まりを見せているのかもしれないが、以下の内容がコマギレ的な製作中心の展開となり、子どもは保育者により仕組まれた路線の上を、ただなぞりながら、はるか10週も先の開店日に向かわされるのである。

また、「生活の教育化」を唱えているにもかかわらず、導入期の自由遊戯及び誘導保育案の中には、場として設定した店での売り買い遊び⁽¹⁴⁾お店やごっこが展開する姿がない。また、売り出し終了後も自由遊戯の場面に反映されていく姿の押さえが具体的になされていないのである。つまり「幼児の生活から出発し、幼児の生活に帰着⁽¹⁴⁾」する保育実践とは、かけ離れているものとなっていると言える。

こうしてみると、1で述べた実践が理論面と矛盾するという点は、単に一保姆の資質・力量の問題ではなく、倉橋自身の理論の問題として捉えられる。

その第一は、自然詩人を例えとする情緒主義的な子ども観による内的生命力に全てをゆだねる点である。この事は、子どもへの過大評価を導き出し、保姆による適切な対応・課題要求の混乱を生んだ。

第二は、方法的にヒントを得たプロジェクト・メソッド（特にコンダクト・カリキュラム）を主題設定のみの採用に終わり「子ども相互の間」の指導や問題解決力の養成にまで至らず、個に終始した点である。こうした視点では、子どもは常に対保姆との関係で向き合っているだけに止どまる危険性を残してしまう。

第三はその生活観において社会生活（人間の現実課題）から遊離し、限られた上流階層を対象にした花園的な生活観の限界といった点である。この点は、第一の点とも重なって、生々しい子どもの現実課題を直視することなく、問題回避の傾向を生む事につながる。

以上を通して、倉橋理論による実践は、生活への着眼及び子どもの側に立つ保育の提唱と言う保育全体にかかわる点は評価できるが、その理論上、活動内容の質的深まりと言う点には弱さを持っていた。この事は、自ずと子ども相互の力で生活をつくる『営むと言う視点を欠落させてしまい、今日求められているような科学的分析による真の子ども主体の実践の創造に対しては、限界を持っていたと言えよう。

3 明石女師附幼における“お店やごっこ”

同時代にあつて、生活に着目した実践を展開したものとして、明石女師附幼の保育が上げられる。この園は大正元年に「分団式動的教育法」を提唱した及川平治の理論により、生活と学習の統一をめざして進められていた。その思想はデュイのプラグマティズムを背景とした世界の新教育運動に位置づくものであり、時間的にも思想的にも倉橋より早く、そして深い思考・実践の上に立っていたものであった。

こうした中で及川は、従来の教材本位の指導からの脱皮を目指し、大正15年の欧米視察後、カリキュラム改造を手掛け、この時期、生活単位カリキュラムを編成するに至った。つまり、プロジェクト法に学びながら、保育の目的に照らして生活単位を組織し、子どもの必要・興味を価値ある方向に導き、生活の様式を悟らせようとしたのである。

この中で、“お店やごっこ”は「生活経験の系列」¹⁵⁾として組織化され、これとは別に立案されている保育項目カリキュラムのねらいも随伴して達するものとされている。そして幼児の新地位に立ち、その地位を改造するための積極的な意味合いを持つ組織的な活動としての位置を持つていくことになったのである。

この事は、実践の展開に対しても反映されてきており、例えば、活動の興味及び見通しを持たせる果物屋見学から始まり、製作物の相談、陳列の仕方といった点も子どもたちに任せていくというように、目的立案力やその実現のためので、また、態度及び望ましい活動へ

の変化として指導のポイントを明確にする事となる。

この事は、倉橋が児童中心主義的に生活全てを自由遊戯―自己充実に帰結する事を理想としながらも、実践に反映されなかった点に対して、大きな隔たりを持つものと言えよう。

4 まとめ

以上、倉橋と及川の理論とそれに基づく実践を見てきたが、それぞれ生活に着眼した点は共通でも、実践そのものは異なった展開となっている。

この違いは既に述べた点だけではなく、子どもへの向い方として、及川が新教育のスタートとして「劣悪児」をよりよくしようとする立場に立ったのに対して、倉橋がある講習会⁽¹⁶⁾で「乱暴児」を排除（退園）する発言をした事に象徴される子ども観・保育観のズレによっていると思われる。この事は、私たち保育者の今後の在り方の土台に関わる点として、重要な問題提起と言える。

よって、これからの“お店やごっこ”実践は、このよ

うな先駆者が示す課題や成果のもと、保育そのものを子ども自らが主体者として営む姿を中心とした“生活づくり”と捉えた上で、教科活動や領域的課題の習得のためでもない、遊びそのものとしてまず位置づけ直さなければならぬと言える。

そして具体的な展開としては、この“生活づくり”を目指す立場から、生活の中核として組織的な活動―単元・中心になる活動としての質を持つことが求められてこよう。“お店やごっこ”はこのように、遊びを土台にこうした活動として考えていかなければならない。

こうした考えを今後に生かすためにも、倉橋の提唱した児童中心主義は評価しながらも、その花園的―情緒的な部分に偏り過ぎず、生活及び子どもそのものを出発点とし、その問題解決を子ども自らが主体的に生活を営む中で、仲間と共に乗り越えていく保育実践を展開していかなければならない。その時私たちは、これまで評価の少なかった及川の理論にこそ、多くを学んで行かなければならないと思う。

《引用文献》

- (1) 倉橋惣三『幼稚園保育法真諦』（東洋図書）昭和9年 174頁
- (2) 同右（同書は『倉橋惣三選集』第1巻フレール館、昭和40年に収録。本書の引用の以下のものは、全てそれによった。69頁）
- (3) 同右 45頁
- (4) 同右 70頁
- (5) 同右 72頁
- (6) (1)に同じ。238頁。243頁。
- (7) 同右 244頁。252頁。
- (8) 同右 239頁。244頁。
- (9) 例えば、小木美代子「戦後わが国の『保育構造』論をめぐって」『保育研究』6—2号、昭和60年7月、（建帛社）がある。
- (10) 宋戸健夫『日本の幼児保育 上』（青木書店）昭和63年 40頁。
- (11) (1)に同じ 256頁。
- (12) 倉橋惣三「解説」『系統的保育案の実際』（東京女子高等師範学校附属幼稚園編、日本幼稚園協会発行）昭和10年
- (13) 菊池ふじの「誘導保育」『系統的保育案の実際』（6）『幼児の教育』第36巻第9号、昭和11年
- (14) (11)に同じ。
- (15) 及川平治「分団教育の変化とカリキュラム改造」『教育論叢』昭和8年
- (16) 倉橋惣三応答「講習会に於ける質疑応答」『幼児の教育』第33第8・9号、昭和8年

（東立川幼稚園）

<p>東京女高師付効 （「大賣出し」あそび） 同園保母 神原キヲ （昭和7年）一年年少</p>	<p>東京女高師付効 （おもちゃや星） 同園保母菊池ふじの （昭和10年）一年年少</p>	<p>明石女師付効 （果物屋遊び） 同園保母岡本きくゑ （昭和9年）一年長</p>
<p>主張 （生活の中心主題化）</p> <p>不 明 示</p> <p>「この楽しさを助長し「意義多い価値高きものにする」</p>	<p>主 義……………（保 育 案 の 渾 然 化）</p> <p>【期待効果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各種材料による製作 ・陳列に依つてものの整理、 ・買いひ遊びに依る社会生活、 ・興味 ・観察 	<p>生活と学習の統一 （生活単位の組織化）</p> <p>【到達目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> ①果物屋を見学する態度 ②初夏の果物の特徴をつかまへそれらしく製作する技能 ③陳列の仕方についての知識 ④売手、買手の作法 ⑤十以下の数概念
<p>活動目的</p> <p>①導入＝相談会（一日目） ●「Tより今年も大賣出しをしよう」と提案。Cも経 験あり販賣を上げる。 ●やりたいお店を出させ、Tが黒板に書く。 ●売りたい物を男児の好きな紙つかせ、出させる。 ●TよりCに作り方を聞いた後、やる店の整理。後でT が決める。 ②やる店の決定・分担 ●Tが効果が上がり、作り易そうな店（おもちゃ屋・ 下駄屋・家長器・呉服屋・瀬戸物屋）を選定しラシ引 きで割り当てる。 ③製作（約一週間） ●責任と権利を持たせでの取り組み。 ●数が必要ところはクラス全体で手伝いをする。 ●日程・品種・数量はグラフ化し、助けておく。 ●家庭でも手伝ってもらう。 ●作る数は、クラス総計599個。一人あたり25個の割当。 一日平均（賣出しの二日目）では5個製作 ④店がまよ（賣出しの二日目）では5個製作 ●机・陳列台・各店の配置をTがする。 ●店の装飾もTが家裁のよさそうに飾る。 ●組の女児見知らずの菓子をかかせる。 ⑤値段つてとお金 ●5銭貨幣を上順に、購買総計と品数・品種を考慮して、 売値を決める。このグラフが欲しいものは高値をつけ、 買えないようにしておく。 ⑥宣伝・ボスター・ビュウ・案内状（前日） ●各組に案内状と5銭入ったまきを預ける。 ⑦開店（初日五時、二日目＝年長） ●売り出しの注意をTより、のみこさせる。 ●チップで園内を呼び込み。 ●二日目には元氣なし、残りを自分たちで買う。</p>	<p>①主題設定の理由 ●前週保育案である「島の家」（9月11日より2週間） への興味も湧き、「秋祭り」の神輿騒ぎも決まり、 今度は落ち着いて仕事の出来るものが計画される。 ②導入 ●「Tより店がまよとして、子どもに合せて間口2m奥行 1.5m高さ2mのものを作る。」 ③製作 ●第一週目（2回）一鳥のおもちゃ 子どもに親しみのある鳥をなるべく立体的に作り車で 引く様にするか、立たせるかにする。一例として、ペ ンギンをのせておく。 ●第二週目（3回）一鳥つり・日の丸の国旗・てんとう 虫 ●第三週目（2回）一人形 花子さん・でんでん虫 ●第四週目（2回）一音かざり・こま ●第五週目（2回）一ビエロ人形 ●第六週目（3回）一さきぎ・扇・刀 ●第七週目（4回）一さきぎ・クラクラ人形・人形の着物 ●第八週目（3回）一双六のさいころ、風車2種 ●第九週目（3回）一お金（第九週目） ④値段つて（正味）とお金（第九週目） ●年少の2学期ではあり、1、5、10銭の数を目指す。 ただ、まだお金の実数は無関心だ。しかし、売り買 いには不可欠だから作らせる。 ⑤看板（第九週目） ●店名・装飾は子どもたちの製作。 ⑥玩具店完成（第九週目） ●完成したら、4～5日そのまま飾って喜びに浸る。 ⑦買い買ひ遊び（第九週目） ●売手、買手共に楽しくて、地に足がついていない様子。 「簡単な数の計算」の期待は効果なし。</p>	<p>【動機】＝売買ごっこの興味を出発とす</p> <p>幼 児 の 活 動</p> <ol style="list-style-type: none"> ①果物屋見学 種類（どんなものがあるか） 色、大きさ、設け方 ②製作についての相談と実習 粘土製作 イ 向を作るカ ロ 作り方 ハ、実物との比較訂正 第一日分 ③製作実習 切紙細工 イ 実物観察、形と色 ロ 着色、切紙で作る ④製作物の知識 イ ならべ方 ロ どれが上手に出来たかを 決める 形、色、作り方 第二日分 ⑤売手、買手の決定 希望によつて ⑥売買実習 イ 一人にやらす 用語、動作 紙製貨幣の使い方 イ 自由売買 ハ 売手、買手の交代 <p>○よく注意してみる習慣 ○売手、買手に適当な言葉 をつかふ能力 ごめん下さい、いくらで すか、いくら下さい、は い、ありがとうございます した、毎度ありがとうございます ○果物の値段の知識 ○十以上の数概念</p>